

暑中お見舞い
申上げます



新型コロナウイルス禍のなか、くれぐれも
ご自愛くださいますように

二〇二一年 盛夏

日本共産党
民報編集部

ふじしま焼肉フェスティバル、家で焼肉が好評



ふじしま焼肉フェスティバル売上枚数2021.08.01

	R3	R1	増減
黒毛和牛ロースステーキ	152	138	14
庄内牛ロースステーキ	444	462	-18
黒毛和牛焼肉セット	130	138	-8
庄内牛焼肉セット	256	268	-12
庄内豚焼肉セット	219	258	-39
庄内牛ロースステーキビッグサイズ	105	-	105
合計	1,306	1,264	42

例年の芝生広場でのイベントは中止しましたが、売上枚数は伸びて、8月1日当日はおよそ1600台の車が肉の引換えにきました。



藤沢周平を読む② 鈴木重雄(八色木)

■上野元三郎先生と藤沢周平(つづき)

上野元三郎先生は中橋からの通勤は大変だったため、八色木の鈴木五郎右衛門家に下宿された。

当主・五郎吉氏は村長を務め、「教育は人なり」との考えで優秀な教師を招聘(しょうへい)し、学校教育には熱心であった。

上野先生は1924(大正13)年、八栄島小学校の校歌を作詞された。

何度読んでもすばらしい校歌である。

一、いや榮えゆく八栄島の／学びの庭に学ぶ兒よ／勅(みこと)かしこみ身を鍊(きた)へ／心を磨きすすみゆけ
二、山はた高く水清き／豊かなる地に住める兒よ／持てる純心(まごころ)うしなわで／世に遅れずに進めよや
作曲は須貝(すがい)ときを。

終戦後「勅(みこと)かしこみ」が軍国主義であるとの事で、「教えを守り」に変えられた。

上野校長は、目の前に座っている生徒が、のちに自分の後を追って師範学校に行き、そのうえ小説まで書くよ

うになるとは夢にも思わなかったらう。

周平が文学を志し小説を書くようになったのは、上野先生に魅かれたのだと言っている。

私たちが生まれ育った昭和時代は、1931(昭和6)年の満州事変に始まり太平洋戦争へと、戦争に翻弄(ほんろう)された青少年時代であった。

1934(昭和9)年、周平は黄金小学校に入学し、1、2年の担任は大久保先生(女)であったが、通勤バスの火災事故で死亡された。

3年は難波主税先生で、娘の松田静子先生(元鶴岡北高教諭)は藤沢周平文学研究家であるのは奇なる縁である。

5、6年の担任の宮崎東龍先生はスポーツマンでピアノも弾き、文学の素養も深い先生であったが癩(かみどぐ)持ちであった。それが原因で周平は声が出なくなった。先生は指名して本を読ませるが、どもって話せなかった。先生はヴィクトル・ユーゴーのレ・ミゼラブルを読んでもくれたり、綴り方を書かせ、一人ひとりに返す時は朱筆で感想を書いてくれた。

6年の夏休みの終わり頃、先生が軍に召集されたか満州開拓団に行ったか、突然学校を去ったので、上野元三郎校長が担任したのであった。(つづく)



1985(明治28)年 八栄島小学校校舎

十文字中華
そば提供日
8月10日(火)
8月20日(金)
「ぼっぼの湯」食堂

遠望看向日葵

遠望向日葵を看る

城貞(藤の花)

閃閃太陽照野英
蝶蜂何識一時来
色金破蕾大輪蕊
誰曰葵花向日傾

閃閃たる太陽 野英を照らす
蝶蜂 何くに識て一時に来たる
色金にして蕾を破る大輪の蕊
誰れか曰う葵花日に向かつて傾くと

キラキラとした夏の太陽が野の花を照らしている。

蝶や蜂がどこで花が咲いたのを知ったのかしばらくや
つて来る。

花はあたかも黄金のごとく輝き、大輪の花が咲き始め
ている。

誰が言ったのだろうか。ヒマワリは太陽に輝いて咲くと。



遠望||遠方を見渡す。向日葵||ヒマワリ。閃閃||キラキラした光るさま。照||光り輝く。英||花。蝶蜂||チョウチョとハチ。識||知る。一時||しばらく。金||金色。蕊||花。誰曰||誰が言ったのか「曰」は「日」とは別字、「曰」は言う、「日」はひ。葵花||ひまわり。

(写真は月山高原ひまわり畑HPから)

インボイスで「ややこしい事務 を押し付けるな」読者の反響

民報前号の「10月から課税事業者の登録始まる」の記事で、農家から「同感。これ以上ややこしい事務を押し付けるな」というメールをいただきました。

小規模農家は、農協や直売所などに「委託販売」していれば、一定の条件で農協等の中間業者が、農家に代わってインボイスに代わる書類を発行できる特例があります。

この場合は、農家が免税事業者であっても、購入者は仕入税額控除

が可能です。

ひと

阿部亀治 ② コシヒカリ・ササニシキの先祖「亀 の尾」を発見 青山 崇

「亀の尾」の特徴は、強風に耐え冷害や病気に強く収穫も上がることから、他の品種と比べて茎が長くしなやかで、風害に対して比較的倒れにくく、害虫にも強く、穂が出てから実るまでの期間が短いのです。

しかも、多くの肥料を必要とせずに、安定した収穫が可能でした。その後も、亀治は実った稲から優秀な稲穂を選び出すことを毎年行つて、種の劣化を防ぎました。

農協などに委託販売をしていない免税農家は、取引から排除される可能性が大了。

1905年(明治38)、

宮城県と福島県が大凶作となり、両県から種籾にする「亀の尾」の注文が届きました。

亀治は種籾一斗を寄付しました。訪れた人にも無料でゆずり、熱心に農業改良に取り組みました。

このような亀治の努力が実つて、明治の末から大正にかけて、「亀の尾」は、国内はもとより朝鮮半島や台湾でも栽培され、栽培面積が約19万5千ha(現庄

内の水田23万7千ha)に達し、「神力」や「愛国」と並んで米の3大品種の一つになりました。

生涯を米の品種改良にかけた亀治は1927年(昭和2)に藍綬褒章を受章し、これを記念して村の八幡神社の境内に顕彰碑が建てられ、除幕式には亀治も出席しましたが、翌年61歳で生涯を閉じました。

「亀の尾」は、現在のおいしい米の交配親なので、その後も育種関係者の注目を集めて



バレバレの下心

カーラジオに「ヤツター」の声が出たのでした。それは、広島高裁が黒い雨訴訟で国などの上告を認めなかったと聞いたからです。

▲黒い雨訴訟とは、広島への原爆投下直後に降ったという黒い雨。この雨が降った地域の人も被爆者手帳の交付と救済を求めて訴えたもので、広島地裁ではこの訴えが認められていたもの。国は、嫌がる県と市をどう脅したかなだめたか、一緒に上告していたんだ。

▲国は、翌日には早くも最高裁に上告することを決めて、県と市に「一緒に」と声をかけたんだが、断られたんだ。一方、新聞・テレビで報道のように、原告が高齢になつているので上告はするなと呼び掛けられていたんだ。やむなく「上告断念」

います。

最近、酒づくりに好適な品種としての評価が高まり、全国の蔵元で「亀の尾」が使用されるようになりました。毎年9月5日に頌徳祭が行われ、阿部亀治翁の偉業を偲んでいます。



(阿部亀治翁頌徳碑)

の首相の談話だが、これがまたテレビは丁寧だったワ。シタゴコロがバレバレだったぜ。

▲つまり、秋の選挙と内閣支持率の低下に歯止めをかけたことの、歯の浮くような丁寧な話ぶりだったでしょう。

曰く、原告が高齢になつたので・だ。誰が高齢にしたんだヨ。今また上告していればもつと高齢になるんだぜ。

曰く、上告したい大臣を抑えて自分が英断を下したんだとか、熟慮に熟慮を重ねたんだとか・だ。コロナ禍も国会は閉会し、この頃国民に話しかけはしていなかった中で・だデ。

▲熟慮の前身はヤツパリだったんじゃないですか。今までの政府の態度からすれば、被爆者援護法の精神を理解しての上告断念とは信じ難いが、上告期限が過ぎて国の敗訴が決まったんだ。仕事を急げや急げ・だ。(石川)